

み

づ

ゑ

第十九

明治三十九年十二月三日發行

水彩畫を學ぶの順序

〔三〕

丸山 晩霞

(夏期講習會に於ける講話の概要)

△これから、花を除いたる草木の色について、余の研究を陳べやうと思ふ。

△草木には各々異なりたる特有の色がある、夫故單に木や草は綠であるといふやうな觀念を持つてはいけぬ。

△草木の色を四季を通じて研究すべきであるが、余は去年より今年へかけて夏の綠を研究した故、その結果を話すとする。

△樹葉の綠、それは凡そ五つに分つとが出来る。一、光澤ある黃勝の透明したる綠。二、光澤なき濃き綠。三、藍勝の綠。四、黃茶勝の綠。五、光澤ありて白く光る綠。

△第一の光澤ある黃勝の透明したる綠とは、初夏新綠の頃の綠で、木の葉の薄く透明したるものである。第二の光澤なき濃き綠とは、厚き葉で光が容易に通さぬ、榎及松杉の如き、櫻の古葉の如きは一例であつて、夏は大部分を占めてゐる。第三の藍勝の綠とは、柳、ドロ、朴の木の子葉が厚く裏が白く、表裏相映じて藍色に見える。第四の黃茶勝の綠は、常磐木の類の太陽に面した時よく現はるるもの。第五の光澤ありて白く光る綠は、研究に頗る苦心したもので、天氣のよい時花かと思ふ程白く、曇ると空か映じて白綠に光る、何の樹をいふとなく、凡て光澤ある葉に見る綠である。

△さてその描法、即ち色の出し方につき左に説明しやう。

△アメリカの某畫家の研究にはなるべく少數な色でやる方がよく、三色、即ち赤はローズマダー、黄はレモンエロー、青はコバルト、それ丈けて繪を描いた。この三色畫は中々流行したもので、コテ／＼色を澤山使用したよりも、却て面白い結果を得たといふものである。

△ホワイトを使用するは不得止場合に限る、色料はそう澤山入用のものでないから、類似な色や減多に使用せぬ。グラマ色は澤山持たぬ方がよい。

△色には透明、不透明、半透明の別がある。自然の色が透明なら透明色を用ひ、不透明なら不透明色を用ふべきであるが、不透明色を用ひても透明に見せるとを得るものであるから、要は其感を充分現はし得ればよいので、繪の具は何でもよいのである。

△夏の緑は、通常青と黄との化合色で、黄は初夏に尤も大部分を占めてゐるが、盛夏でも猶黄の量は多いものである。

△黄は變色する傾がある、殊に雌黄の如きは永久の色ではない、古畫の蒼白なるは黄の飛散したゝめである。

△水彩畫に硝子を掩ふのは、其色を保護する點から必要である。濕氣を防ぐ爲めには、畫面を硝子へ直接につけずして、離す方がよい、マツトを入れるのはよいものである。

△繪の具にパーマ子、即ち永久の稱あるものは割合に變色せぬ。

△彩料は、動植物及鑛物から製すもので、鑛物より作りしものが一番永久で、次は動物、植物性は多く永久でない。

△繪具の製造所は世界各地にあるが、余の知る處ではニューマン製がよい、ニューマンにては繪具を器械で造らぬと自慢してゐる。ニュートン製は廣く用ひられてゐるか、ロンドンの畫家は使用せぬ。佛蘭西製に

もよく使用に耐えるのがある。

△さて第一の緑、即ち光澤ありて黄勝な透明なる緑を作るには、黄はパトマ子ントエロトがよい、或はオトレオリンでもよい、これは光があつて透明な黄である。これにエメラルドグリーンを調合すると美しい緑が出来る。

△レモンエロトにエメラルドグリーン、これでもよい、これは兩方共不透明ではあるが、日光の輝いた透明した感の色が出来る。

△不得止はガムボーヂとエメラルドグリーンである。

△緑に多少赤味を帯びた時はガドミュームエロトにエメラルドグリーン。

△森の中などの、樹や草の葉の薄きものには、多少の青味を帯ふるのので、それにはアントワープブルーにレモンエロトを混ぜる、ブルシアンプルーにガムボーヂでもよい。

△エメラルドグリーンは、白緑の不透明な色である、此色は日本の自然界に於てあまり見出さぬ、淺間の噴火口の内部に煙のない時硫氣が發して此色が見える。

△エメラルドグリーンは死色^{デッドカラー}である、これを活かすに、少量の黄を加へると大によく、燃立つやうな色になる。

△美しき緑は、寫してゐるうち他の繪具で濁らす恐れがある、注意して堺をよくつけねばならぬ、一番安全なのは、美しく光れる處は、白く紙の地を残して置いて、最後に清い色で塗るのである。

△第二の光澤なき濃綠色は、インヂゴを重なる色とする。インヂゴは夏に限らず、日本の風景を描くに欠くもの出来ぬ色である。

△インヂゴは植物質の色である、日本繪具の藍棒を用ひてもよい、却てよい發色が出るが冬は用ゐられぬ。

△インヂゴの中へ不透明な黄を入れると、光澤のない緑が出来る、ガドミユームエロー、レモンエロー、パーマネントエロー、クロームエローの類である。

△右等の色の缺乏した時の代用として、インヂゴの代りにアントワールブルー、プロシアンブルーの類が用ひらるゝ。これ等の色は強烈であるから、是非ローズマダー、カーマイン、クリムソンレーキ或はパープルレーキの如き透明した紅色を混ぜて、色を殺さねばならぬ。

△此種の緑は大部分を占めてゐる、そして其濃淡のある中で、蔭の暗い部分には光澤がある、そこへ透明色なるイタリアンピンク、ローアンバー、ガムボーヂ、インヂアンエロー、ローシーナ等が用ひられる。

△蔭の中には猶一層深い色がある、これがなければ奥行が見えぬ、それは透明な紅色を用ゐるので、即ちパープルマダー、ブラオンマダー、カーマイン、クリムソンレーキの類で、ピンクマダー、ローズマダーもよい、但此二色は美しい色ではあるが、價が高く且永久でない。

△重潤する色は、サツプグリーン、オリーヴグリーン等がある。

△以上は近い距離の場合である。

△第三藍勝の緑、これもインヂゴが土臺で、少量の子ブルスエロー、レモンエロー、クロームエローを混ぜ、時にエメラルド、インヂアンエローなどを混ぜるとよい、其蔭にはインヂゴにオリーヴグリーン、夫にカーマインを加へる。白の小量を用ゐるもよいが、洗ふ方が猶よいのである。

△第四の黄茶勝の緑、即ち常磐木の日に照らされたる時、多くエローカーを用ゐるが、他色と出合ぬ。時として害する恐れがある、この際にはオリーヴグリーンが適當である。この繪具の佛國製チユウヴ入はニユーマンの品より使ひよい、次にはカドミユームにインヂゴを混する次には全然混せず、黄勝の緑を以て着色し、而して後ローアンバー、又はローシーナを重潤してもよい、ライトレッドを薄く用ゐるもよい、カーマイン、クリムソンレーキもよい、此色は一度では出悪いから、重潤する方がよい、パレットの上で混ぜ

でも出悪いのである。

△此緑の蔭には、インヂゴーにオリヴァグリーンの如きもの、ローシーナの類である。(つゞく)

着色の談

石川 欽一郎

着色は即ち色の調子で有りますが、之れは使用する色の種類と混ぜ方により大に關係がある、Gamboge と云ふ黄色は透明で暢びの能い軽い色であるから、何にか綠色と混ぜれば、日向の草の色、若葉等に最も適する、又た花の色、果實の色にも能く使用しますが、缺點は變色するのと、色の薄ッぺらなるとにありますが、故に Cadmium Yellow を混ぜ用ゆると都合が能い、此色は肉もあり照りもあり、キ、の能い色であります、變色もしません、只不透明であるから前の如くのように軽るくは行きません、此二つの色を一處にしたやうな

Aniline

と云ふ繪の具があります、之れならば一色で二つの代はりをする極好い色です、價は少し高い、凡

て此等の明るい色を塗る場合には、第一筆がキレイでなければならず、水もキレイでなければならぬ、又繪具其物が全くキレイで無ければいけません、之れが着色の上に大に關係する、Gamboge とか Lake とか云ふ透明な軽い色は、少しでも筆や水に混りけがあると直ぐ感する、又一度汚れて着いた色は、洗つて塗り直しても到底無駄です、ワルイ事は申しませんから此點に充分注意して、一つやつて御覽なさい、Light Red と云ふ色があります、又 Venetian Red と云ふのもあります、似たやうな色であるが、この方が稍や軽るく、且つ明るい、僕は此方がスキですが、此色と他の青色若くは藍色と混ぜるには注意しないと不透明な死んだ色が出る、Indian Red ても亦同様です、雲の灰色などには此等の三 Red と Cobalt 又は French Blue 或は時に Indigo と適度に混ぜる、Vermilion とませる事もあります、混ぜ方が悪いと往々黒インキの腐れたやうな色が出る、思ふに一遍に濃く塗るから悪いので、適度の色を一度塗り、又乾いた上に塗るようにすればそんな